

現代社会におけるローカル・コモنزの意義

The significance of local commons in modern society

川田 美紀(KAWATA Miki)

本研究は、平成 24 年度から継続しておこなっているローカル・コモنزに関する事例研究である。ローカル・コモنزをめぐっては、経済学、人類学、社会学、民俗学などの分野で研究がすすめられてきたが、その多くは生業や生計維持と密接に関係している資源を対象としている。それに対して、本研究では、どちらかといえば生業や生計維持にはあまり関係しない資源に注目して研究をおこなってきた。というのも、現代日本社会においては、生業や生計維持のために自然資源を共同利用する機会が過去と比較すると減少していると考えられ、ゆえに、ローカル・コモنزの意義を明らかにするためには、生業や生計維持に関係している資源よりも、生業や生計維持にはあまり関係しない／関係しなくなった資源にも注目する必要があるだろうと考えたからである。

主な調査地は、沖縄県国頭郡今帰仁村古宇利地区である。24 年度は現地のさまざまな自然資源の共同利用・管理のデータを収集した。その結果、生業や生計維持の観点からは大きな意味を持たない、周期的な資源利用(ある特定の時期にのみおこなわれる資源利用)が、少なからず継続的に行われていることがわかった。そこで、25 年度は、とくに周期的な資源利用に注目して調査をすすめた。

現在も調査地で行われている周期的な資源利用には、男性によるもの、女性によるもの、自家消費されるもの、分配されるもの、換金されるものなど幾つかのバリエーションがある。しかし、聞き取り調査や参与観察をしていると、共通する規範のようなものもあるように思われる。それは、資源の採取や捕獲は、たとえ 1 人で採取や捕獲が可能であっても、複数の人たちで一緒におこなわれる(誘い合って採取、捕獲する)傾向があるということ、採取あるいは捕獲した資源はしばしばお裾分けされるということである。

今後、これらの行為を周期的な資源利用に共通する規範として論じることが可能なのか、また、これらの行為以外にも共通する規範があるのか、古宇利地区においてさらに調査をすすめる。さらに、この議論は古宇利地区に限定されるものなのか、あるいはより普遍的なものとして考えられるのか、沖縄の他地区や、他県における周期的な資源利用の調査もおこない、検討する予定である。